小学生の部

入賞作品

死んだらどうなるのかな？　……　伊丹　璃子
ふるさと　……　齋藤悠一郎
わたしがすきなさんぽのみち　…　菊池　梨花
やさしいガイコツの手　……　山本　芹
お母さん　……　中島　穂波
命のパス　……　野村悠太郎
ぼくのサッカーだあれが作る　…　橘田　志道
花たちのおしゃべり　……　谷川　茉優
木細工の夜　……　菊池紗央理
空　……　上野　桃佳

死んだらどうなるのかな？（文部科学大臣賞）

京都府　京都教育大学附属京都小中学校初等部　四年　伊丹璃子

ふと思った…
死んだらどうなるのかな？
電気のスイッチ切るみたいに
まっ黒になるのかな？
それとも、「じごくのそうべえ」みたいに
えんま様の所に行くのかな？
わたしは天国に行くのかな？
どっちにしても死ぬのはこわい…
お母さんに聞くと、
「えい遠のなぞやな。死んで帰って来た人は
いいひんし。」
おばあちゃんが言った。
「死んだら電話で教えたげる。」

みんなで笑った。
だけど本当にかかってきたらどうしょう。

ふるさと（国民文化祭実行委員会会長賞）

茨城県　茨城大学教育学部附属小学校　六年　齋藤　悠一郎

生まれたときから
この家に住んでいる
木造二階建て入母屋造り
家には動物たちがひそんでいる
鴨居　猫間障子　犬走り
小さな庭にはたくさんの野菜
サツマイモ　スイカにトウガン　モロヘイヤ
ヤマイモ　ピーマン　ナス　カボチャ
しげる野菜のその奥で
ひっそりノカンゾウが咲き出した
母がつぼみを摘んで
お吸い物に入れる
しゃきしゃきと夏の夕暮れの味がする

夜になると
遠くから蛙の声が波のように響いてくる
毎朝気動車に乗って
街の学校に通う
車窓に広がる青々とした田んぼ
点々とシラサギが立つ
やがて大きな川を渡ると
一気に街に入る
ここで乗り換えたら東京まで行ける
高速バスで空港に向かえば
外国にも行ける
父はたまに
訳の分からない言葉を発する
「ラ　ビダ　エス　ベジャ」
若い頃スペインで暮らしていたらしい
ぼくも外国に行ってみたいな
きっとそのとき

今住んでいる家や場所が
様々なことをぼくに語りかけてくる
そんな気がする

わたしがすきなさんぽのみち（宮崎県知事賞）

岩手県　奥州市立木細工小学校　一年　菊池梨花

「まま　どこにいくの」
「やまのみちに　さんぽにいくよ」
「ねえ　まって　りんもいく」
いそいではしって　おいついた
「くま　でねばいいな」
ばあちゃんは
いつも　しんぱいそうだけど
だいじょうぶだよ
ままも　おねえちゃんも
いっしょだから

ゆっくりのぼった　やまのみち
はじっこには　かもしかのあしあと

ぴいすさいんみたい　かわいいな
きのえだがにほん　おちていた
ちかくにいってみたら
うねうねと　うごいていた
「まま　これなんなの」
「へびじゃないの」
「きゃあ　まままあ」
せなかにのったら
ままは　ぴょんととびこえてくれた
へびのいじわる
ちょっぴりなみだがでちゃった

きゅうに　おおきなきが　なくなって
まえが　ぱあっと　あかるくなった
みぎとひだりに　どおんと
おおきなやま
うすいみどりいろのき

ぴんくいろのやまざくら
やまとやまの　あいだには
ちいさくみえる　がっこうのやね
ずっととおくに　くろいやま
ひゅうっと　かぜがふいた
すずしいなぁ　いいきもち
すこし　あまいにおいがした

「くまよけに　おおきいこえだそうか」
わたしが　さそった
「うん　さんせい」
ままとおねえちゃんがわらった
「わあぁ　わあぁ　わあぁ」
「きゃあ　きゃあ　きゃあ」
みんなでさけんだ　かえりみち

「ばあちゃん　ただいま」

「おかえり」
ばあちゃんの　にこにこえがお
いっぱいあるいて　おなかがぺこぺこ
またいきたいな
やまのみちは
わたしがすきな　さんぽのみちだよ

やさしいガイコツの手（宮崎県教育委員会教育長賞）

京都府　京都教育大学附属京都小中学校初等部　四年　山本　芹

「そうか、そうか」
なきたい時ガイコツみたいな手が、私の手をやさしくつつんでくれる。
「そうか、そうか」
うれしい時ガイコツみたいな手が、私の手をやさしくつつんでくれる。
「そうか、そうか」
ママにおこられた時ガイコツみたいな手が、私の手を、やさしくつつんでくれる。
「そうかそうか」
どんな時も、クシャクシャのえ顔とガイコツみたいな手で、私を元気にしてくれる。
「私の大好きな、ひいおばあちゃん」

お母さん

（第35回国民文化祭宮崎県実行委員会、第20回全国障害者芸術・文化祭実行委員会会長賞）

京都府　京都教育大学附属京都小中学校初等部　四年　中島穂波

「なにが見える？」
お母さんが
はばたいて言った
「空！」
と、答えた
「ほかには？」
「町と人と木！」
わたしは
初めて見るものが多かった
知っているものは
空と町と人と木

毎日お母さんに

なん十回も聞いている
「あれなに？」
お母さんは
やさしく答えてくれる
それに
お母さんは
なにかがわたしをおそってきたとき
わたしを木のかげにかくしてくれた

食べ物がなかったとき
お母さんが分けてくれた

わたしは今日も
はばたきながら聞く
「あれなに？」
すると
人の気配がした

わたしと
お母さんはいそいで
木のかげにかくれた

「あっちょうちょうがいる！」
「本当！きれいね。そっとしておいてあげようね」

「お母さんあの人もお母さん？」
お母さんは
やさしくわらった

命のパス（宮崎市長賞）

京都府　京都教育大学附属京都小中学校初等部　四年
野　村　悠太郎

公園でてんとう虫を見つけた
けれどひからびていた
羽の中にありがいた
てんとう虫は死んだけど
ありはその分生きていく
そのありをミミズが食べ
ミミズはその分生きていく
そのミミズをにわとりが食べ
そのにわとりを人間が食べ
てんとう虫は人間までパスをつなげ
食物連鎖は永遠と
今日もだれかが
パスを受ける

ぼくのサッカーだあれが作る（宮崎市教育委員会教育長賞）

京都府　京都教育大学附属京都小中学校初等部　四年　橘　田　志　道

ぼくは、足でボールをける
そのボールはだあれが作る
ぼくがボールをゴールにいれる
そのゴールは、だあれが作る
ゴールにいれたらネットがゆれた
そのネットは、だあれが作る
ネットは、糸からできている
その糸は、だあれが作る
ぼくは合宿でしばふを見つめた
そのしばふは、だあれが作る
ぼくは、合宿場にあるいすにすわった
そのいすは、だあれが作る
そのいすは、木でつくられていた

その木は、だあれが作る
ぼくは、海岸にきたそこで石を拾った
その石はだあれが作る
ぼくはすなで、ちっちゃな山を作った
そのすなは、だあれが作る
公園に行ってリフティングの数をかぞえた
その数字は、だあれが作る
リフティングをしているのは、ぼくだ
ぼくは、だあれが作る
ぼくは、人間だ
人間は、だあれが作る
一つのせかいは、神さまが作る
そのかみさまは、だあれが作る
すべてのぎもんは、とけなかったけど
ほぼすべてのものは、とけた
そしてそのぎもんは、ぼくが作る
この詩は、じしゅく中に書いた

そのじしゅくは、だあれが作る
じしゅくは、コロナウイルスではじまった
コロナウイルスはだあれが作る

花たちのおしゃべり

（第35回国民文化祭、第20回全国障害者芸術・文化祭宮崎市実行委員会会長賞）

京都府　京都教育大学附属京都小中学校初等部　四年　谷川茉優

いろんなところに
花はさいている
その花みんなおしゃべりしてる
ちょうの羽ばたきみたいな
小さな音で
うふふとわらっているのだろう

たんぽぽの花が
おしゃべりしている
アスファルトの道の
すみっこで
テントウ虫と

春だねって。
ひまわりの花が
おしゃべりしている
庭の大きな植木ばちで
夏がきたよって。
みんなしゃべってる
人に聞こえないような声で
花は生きてるんだよ

木細工の夜（日本現代詩人会会長賞）

岩手県　奥州市立木細工小学校　六年
菊池　紗央理

「今日　満月だよ」
妹のゆっかがさけんだ
庭に出て空を見上げた
外はすごく明るくて
星もピッカピカにかがやいている
「わあ」
「すごい」
二人でさけんだ

お父さんも外に出てきた
「お　きれい」
にこにこしながらつぶやいた

「お父さん　なんで月は光るの」
「ううん　太陽が当たっているからじゃないのかなあ」
お父さんは考えながら言った
太陽は見えないのに　不思議だなあ
「あ　うさぎ」
月にうさぎのも様が見えた
「カニみたいだなあ」
お父さんにも何か　も様が見えたみたい
「じゃあなんで星は光るの」
「なんでだろう」
お父さんが首をひねった
数えきれない程の星が空には広がっていた
「オリオンざを探してみな」
お父さんが夜空を指さして言った
私は夜空の星をじっと見つめた
「あった」

「ちょうネクタイみたい」

きらりと
流れ星が光った
「流れ星　見っけ」
わたしがさけんだ
「どこどこ」
ゆっかも流れ星を探した
「また一緒に見つけよう」
わたしは　ゆっかの顔を見た

きれいな月
きれいな星
きれいな夜空
木細工の夜　大好きだな
これからも
木細工の豊かな自然を
私は大事にしていきたい

空（日本詩人クラブ会長賞）

京都府　京都教育大学附属京都小中学校初等部　四年　上野桃佳

ピクニックに行った
シートの上にねころがると
青い空が見えた
ひつじみたいなくもが
ぽつんと
一人さびしく
青いシートに立っていた
わたしがすわると
そよ風がかみをなでた
なんだかくすぐったくなって
あたりを見回すと
妹がわたしの横顔を
じっとながめていた

わたしは、おかしくなってわらった
妹もわらった
そんなわたしたちを
青空はふしぎそうに見ていた
わたしたちは
わらうのをやめて
風たちのおしゃべりを
しずかにきいていた